

53 明治一二年沖縄県のコレラ流行

——土屋寛信の『琉球紀行』から

○深瀬¹⁾ 泰旦・真柳²⁾ 誠

わが国に近代的統計が採用されて以後、コレラ患者がもつともおおく発生したのは明治一二年（一八七九）である。この年、沖縄県の罹患率は全国平均の五倍におよび、人口千人にたいして五五・〇三人であった。このようなコレラの発生状況と防疫指導のために沖縄県に派遣された土屋寛信は、私的な調査書として『琉球紀行』をのこしている。これをとおして明らかにしえた沖縄県の行政とコレラの流行状況の概要を報告する。

コレラの流行状況を視察するため、土屋寛信は明治一二年八月一三日に内務省御用掛に任命され、沖縄県への出張を命ぜられた。その前日の八月一二日から筆をおこし、翌年一月に御用掛を免ぜられるまでの記録が『琉球紀行』である。表紙の題箋には『琉球紀行 全』とあり、

封面には「沖縄紀行」としてなされている。本文五一丁、版心に「沖縄県」と印刷された一〇行の罫紙にかかれた和綴本の写本である。

その内容を見ると、コレラの流行状況やその調査についてはあまり筆をついやしている様子はなく、琉球の風俗習慣や、明治一二年当時の沖縄県の行政の混乱についての記事が目につく。琉球藩が廃止され、沖縄県が設置されたのがこの年の三月三二日であったことを考えると、十分うなずけるところである。

八月二九日に那覇に到着した土屋寛信は早速活動を開始するが、県政の混乱に災いされて思うにまかせないもどかしさを記している。九月一日に検疫局を開設し、ここで「虎列刺病に関する一切の事務を管理」することになった。九月一八日にいたって予防措置の一環として、那覇市中の溝渠や屠殺場、市場などの掃除に着手し、医師、巡査とともに巡回を開始した。その後九月二六日に、県令鍋島直彬の依頼によって先島地方の巡回視察に出発した。久米島、宮古島などを巡回して那覇港に帰着したのは十一月一八日のことであった。

土屋寛信（一八四一—一九〇七）は陸奥国二本松藩の出身である。藩の侍医土屋寿仙の養子になって、藩校慶学館内の医学寮で小此木玄智について医学を学んで、明治二年（一八六九）二月に藩の侍医になった。明治五年三月陸軍軍医試験に任官し、同年六月には二等軍医副、明治六年一月には一等軍医副に昇進した。同年四月に陸軍を退官して東京・麻布六本木で開業医となった。沖縄県派遣の命をうけたのは、開業医生活をおくっている時期である。

陸軍退官後の明治九年に、『新薬性効』の題名をもつ薬物学書を丸屋善七から出版している。本書は本文九七ページで、イロハ順に六七種類の薬品がおさめられている。同一成分の薬品でも異なった剤型で収載されているので、薬品の数は四二種類にすぎない。いずれも外来薬で、在来からわが国につたわる生薬などの薬物はふくまれていない。

明治一二年のコレラ流行にさいして、沖縄県以外の府県にたいして内務省から医師の派遣があつたか否かについて明らかにしうる史料はみられないが、沖縄県の場合

が他府県とはなほだしく相違していたことが、中央政府からの医師派遣をうながした一因ではなかつたらうか。市井の開業医が、内務省御用掛に採用された経緯を明らかにしめす文書には接していない。明治一〇年代には西洋医学の知識を身につけた医師はけっしておおくはなかつたので、内務省は日常の業務をさばくのに手一杯で、省内には沖縄県へ派遣する適当な人材が見出しえなかつたのではなからうか。かつて陸軍軍医官として勤務した経験もあり、『新薬性効』の著者として医薬品について深い知識とその編纂の経験をかわれてのことであつたといえよう。

(1) 順天堂大学医学研究室

(2) 茨城大学人文学部